

看護臨床実習におけるストレス状況と性格との関連

近村 千穂*1 石崎 文子*2 小山 矩*3
青井 聡美*3 飯田 忠行*4 小林 敏生*1

*1 広島大学大学院保健学研究科

*2 県立広島大学保健福祉学部コミュニケーション障害学科

*3 県立広島大学保健福祉学部看護学科

*4 藤田保健衛生大学医学部公衆衛生学

2006年 9月12日受付

2006年12月12日受理

抄 録

【目的】看護学生の臨床実習におけるストレスとストレスの状況や性格との関連について検討した。

【対象と方法】対象はK大学看護学科3年生の女性27名。方法は、ストレスの程度を評価するために状態-特性不安を日本版 State Trait Anxiety Inventory (STAI) を用いて測定し、臨床実習前と臨床実習中の計2回実施した。また、実習ストレス（鈴木ら）に対する調査も同様に行った。性格の評価は、矢田部・ギルフォード検査 (YG) を用い、臨床実習に関係のない春期休暇中に実施した。

【結果・結論】臨床実習前と実習中では、STAIの状態不安が高くなり、看護学生が臨床実習でストレスを感じていることがわかった。また、実習ストレスの得点の高い者は、YG検査で「気分の変化」、「非協調的」、「情緒不安定」、「社会的不適応」等の項目の得点も高く、ストレス反応と性格との関連性が高いことが示唆された。

キーワード：臨床実習，ストレス因子，矢田部・ギルフォード検査，STAI，看護学生

緒言

近年、ストレス社会と言われているが、医療従事者養成課程における臨床実習は、学生にとって様々なストレスに直面し不安が増大することが報告されている^{1) 2) 3) 4)}。看護教育カリキュラムにおいても、臨床看護実習は(以下、臨床実習とする)将来、看護医療従事者として育っていく学生にとって、学内で学んだ知識や技術を応用し実践的な能力を身につける場としてきわめて重要な役割を担っているとともに、初めての病棟環境や人間関係、自己の看護技術に対する不安、生活パターンの変化など学生にとって大きなストレスに直面することでもあり、これまで臨床実習における不安とストレスには密接な関係があると報告されている²⁾。しかしながら、同じようなストレスに曝露されても、人によってはほとんどストレスとして感じない者もあれば、逆にストレスをため込み、疲労困憊し、健康を害する者など、そのストレス反応は人によって様々であり、ストレスに対する感じ方には個人差がある。ストレスの感じ方は個人の性格や過去の経験などによって影響を受けると考えられる⁵⁾。これまでの臨床実習中のストレスについての報告では、個人の性格についての関連性については、報告は少ないのが現状である^{3) 4) 5) 6) 7) 8)}。

本研究では、看護学生を対象にして、臨床実習におけるストレスおよびストレスの状況と性格との関連を検討した。

研究対象及び研究方法

1 研究対象

K大学看護学科に在学する平成17年度に臨床実習を行う看護学科3年生全員に研究の趣旨を説明し、研究協力に同意を得た33名にアンケート調査を行い、その中から記入漏れのある者を除外した女性27名(平均年齢: 21.5 ± 0.6歳)を分析対象とした。対象とした27名は健康状態に問題がなく、薬の服用もしていなかった。

2 研究方法

生活習慣(年齢、性別、住居形態、食事、アルバイト、部活動、飲酒、喫煙、健康感、睡眠、眠気)と実習ストレスについての質問紙と心理学的検査の日本版 State Trait Anxiety Inventory (STAI)^{9) 10)}についての質問紙を用いて実習前と実習中の平成17年9月から平成18年2月の期間に調査した。実際の実習前調査の時期は平成17年8月から平成17年9月で、実習中調査は平成17年10月下旬から平成18年1月の下旬までの間に実施した。性格検査の矢田部・ギルフォード性格検査¹¹⁾(YG検査)は

平成18年3月に実施した。

1) 生活習慣についての質問調査

対象者の背景とストレスに關与するのではないかと考えられる生活習慣について、年齢、性別、住居形態、食事、アルバイト、部活動、飲酒、喫煙、健康感(最近の自分の健康についてどのように感じるか?)、睡眠(現在、睡眠のことで困っていることがあるか?)、眠気(授業中、実習中に強い眠気を感じることもあるか?)の11項目の質問調査を実習前と実習中の2回実施した。

2) 実習ストレスについての質問紙調査

PaganaのThe Clinical Stress Questionnaireをもとに作成した日本語版CSQである鹿大版CSQ¹²⁾(以下鹿大版CSQとする)を用いて落合らが検討した¹⁾、看護臨床実習に対する不安に関する、信頼性、妥当性についての検討を行った質問31項目中「看護の表現力」、「実習にかかわる人間関係」、「患者・家族との人間関係」、「意志力」、「知識・技術」、「看護婦としてのアイデンティティ」に因子分析したもののから各因子中、寄与率の高いもの3項目(計18項目)を抜粋し用いた。得点方法は、「まったくない」から「非常にある」の5段階尺度にしたがって1から5点にスコア化した。この検査での不安因子は、実習におけるストレスの要因と考えられるため、実習ストレスと命名した。調査時期は、実習前の不安と実際に実習をしてからの不安の変化を測定するため、実習前と実習中の2回実施した。

3) STAI(状態-特性不安尺度)の実施

不安の測定尺度であるSTAIにおいては、状態不安と特性不安の測定が可能とされている。状態不安は、個人がそのときおかれた生活条件により変化する一時的な情緒状態である。特性不安とは、不安状態の経験に対する個人の反応傾向を反映するもので、比較的安定した個人の性格傾向を示すものである¹³⁾。状態不安・特性不安ともに20の質問項目で構成されており、評定は1点から4点の4段階尺度で、項目得点を合計する。状態不安・特性不安ともに20点から80点の値をとり、得点が高いほど不安が強いことを示している。適度の緊張感と不安は、克服しようとする力(動機づけ)となり、学習の深化と共に学生自信の成長発達にもよい影響を与えるが、逆に過度の不安はストレスフルな状態を招く¹⁴⁾といえるので、今回は、STAIを用いてストレスの指標とした。STAIの測定時期については、実習における不安(ストレス)や心理状況の変化を測定するため、実習前と実習中の2回実施した。

4) 性格検査(YG検査)の実施

YG検査¹¹⁾は、12の性格尺度「抑うつ」、「気分の変化」、「劣等感」、「神経質」、「主観的」、「非協動的」、「攻撃的」、「活動的」、「のんき」、「思考的外向」、

「支配性」,「社会的外向」を調べるための120個の質問から成り立っており,はい:2点 どちらでもない:1点 いいえ:0点の回答を合計(各尺度20点満点)する。今回は,12の尺度得点とさらに,12の性格尺度中「抑うつ」,「気分の変化」,「劣等感」,「神経質」の4項目の合計(80点満点)で判断する「情緒不安定」の因子と「主観的」,「非協調的」,「攻撃的」の3項目(60点満点)の合計で判断する「社会不適応」の因子を加え,12尺度と2因子を用いた。また,そのプロフィールの型から性格の特徴を判定した¹⁵⁾。この性格検査は,実習の影響のない春休みに実施した。

3 分析方法

調査内容の各項目について,基礎統計量の集計を行い,STAIと実習ストレスラーの実習前と実習中の変化については,対応のあるt検定を,STAIと実習ストレスラー,YG検査の相関についてはPearsonの検定を行った。統計ソフトはSPSS.Ver.11.5を用いた。

結 果

1 対象者の概要

対象者の背景について表1に示した。

「住居形態」,「食事」,「喫煙」,「睡眠」,「眠気」

表1 対象者の背景 (実習前・実習中)

		(n=27)	
背景		実習前:人(%)	実習中:人(%)
住居形態	1人暮らし	15 (55.6)	13 (48.1)
	家族と同居	10 (37.0)	11 (40.7)
	その他(友達と同居)	2 (7.4)	3 (11.1)
食事	自炊	17 (63.0)	16 (59.3)
	作ってもらう	10 (37.0)	10 (37.0)
	その他(お弁当・外食)	0 (0)	1 (3.7)
アルバイト	している	12 (44.4)	6 (22.2)
	していない	15 (55.6)	21 (77.8)
アルバイトの平均回数(回/週)		2.23回	1.83回
平均時間(時間/週)		34.0時間	19.8時間
部活動	運動部所属	9 (33.3)	7 (25.9)
	文化部所属	5 (18.5)	6 (22.2)
	所属していない	13 (48.1)	14 (51.9)
所属者の部活平均回数(回/週)		1.44回	0.75回
平均時間(時間/週)		5.25時間	3.0時間
飲酒	ほぼ毎日飲む	0 (0)	0 (0)
	週に1~4日飲む	5 (18.5)	2 (7.4)
	月に2,3回以下	17 (63.0)	15 (55.6)
	まったく飲まない	5 (18.5)	10 (37.0)
喫煙	吸った事がない	25 (92.6)	25 (92.6)
	今はやめた	2 (7.4)	2 (7.4)
	1日20本以下	0 (0)	0 (0)
	1日21本以上	0 (0)	0 (0)
健康感	健康だと思う	3 (11.1)	2 (7.4)
	まあまあ健康だ	20 (74.1)	15 (55.6)
	どちらかといえば健康でない	4 (14.8)	10 (37.0)
	健康ではない	0 (0)	0 (0)
睡眠で困っているか?	ない	9 (33.3)	11 (40.7)
	ある	18 (66.7)	16 (59.3)
強い眠気を感じるか? (授業・実習中)			
	週に3回以上ある	9 (33.3)	10 (37.0)
	週に1~2回ある	5 (18.5)	5 (18.5)
	たまにある	11 (40.7)	10 (37.0)
	まったくない	2 (7.4)	2 (7.4)

について、実習前と実習中では大きな変化は認めなかった。

「アルバイト」では、実習前に、「アルバイトをしている」が12名(44.4%)、「アルバイトをしていない」が15名(55.6%)で、アルバイトの平均回数は2.23回/週、平均勤務時間は34.0時間/週であったのに対し、実習中では、「アルバイトをしている」が6名(22.2%)、「アルバイトをしていない」が21名(77.8%)で、アルバイトを辞めた者がおり、アルバイトの平均回数は1.83回/週で、平均勤務時間は19.8時間/週と勤務回数、勤務時間も減少していた。

部活動では、実習前に、「運動部所属」が9名(33.3%)、「文化部所属」が5名(18.5%)、「所属していない」が13名(48.1%)で、部活動の平均回数は1.44回/週で、平均活動時間は5.25時間/週であったのに対し、実習中では、「運動部所属」が7名(25.9%)、「文化部所属」が6名(22.2%)、「所属していない」が14名(51.9%)で、部活動の平均回数は0.75回/週で、平均活動時間は3.0時間/週とアルバイト同様に、活動回数、時間が減少していた。

健康感では、実習前に、「健康だと思う」が3名(11.1%)、「まあまあ健康だ」が20名(74.1%)と多く、「どちらかといえば健康でない」が4名

(14.8%)で、「健康ではない」と答えた人はいなかったのに対し、実習中では、「健康だと思う」が2名(7.4%)、「まあまあ健康だ」が15名(55.6%)と多く、「どちらかといえば健康でない」が10名(37.0%)で、「健康ではない」と答えた人はいなかったが、健康について実習前よりは健康に不安をもつ人が多かった。

喫煙は、実習前、実習中ともに「吸った事がない」が25名(92.6%)と過半数で、他は「今はやめた」が2名(7.4%)で回答時に喫煙をしている人はいなかった。

2 実習ストレスの実習前と実習中の比較 (表2)

実習中は実習前に比べて、実習中に有意に高値であったストレスとしては、「臨床指導者とうまくやれない」、「教官とうまくやれない」(いずれも $P < 0.05$)、「申し送り、報告ができない」、「看護師とうまくやれない」、「患者とうまく話せない」、「患者から拒否された」、「1日の計画をきちんと計画できない」(いずれも $P < 0.01$)、「実習記録が書けない」、「患者の家族とうまくやれない」、「実習は身体が疲れる」、「身体が続かない」、「実習が嫌である」、「見ているだけで手が出せない」、「学校と習ったことと違うことがある」、「何をやればいいのかわからない」、「看護技術をうまく活用できない」、「看護計画を立てアセスメントすることができない」

表2 実習ストレスの実習前と実習中の比較

項目	(n=27)		有意差
	実習前	実習中	
申し送り、報告ができない	1.33±0.88	2.19±1.04	**
実習記録が書けない	1.48±1.19	2.96±1.19	***
看護日誌、体温表が書けない	1.26±0.66	1.59±0.80	n.s.
臨床指導者とうまくやれない	1.37±0.88	2.04±0.76	*
看護師とうまくやれない	1.41±0.74	2.19±0.79	**
教官とうまくやれない	1.41±0.97	1.89±0.64	*
患者とうまく話せない	1.56±1.05	2.26±0.81	**
患者の家族とうまくやれない	1.33±0.68	2.11±0.89	***
患者から拒否された	1.11±0.32	1.74±0.72	**
実習は身体が疲れる	1.85±0.61	4.30±0.61	***
身体が続かない	1.52±1.05	3.37±1.08	***
実習が嫌である	1.81±1.44	3.22±0.97	***
見ているだけで手が出せない	1.48±0.80	2.96±0.85	***
学校で習ったことと違うことがある	1.78±1.16	3.44±0.80	***
何をやればいいのかわからない	1.63±1.12	2.96±0.90	***
1日の計画をきちんと実行できない	1.56±1.01	2.56±0.75	**
看護技術をうまく活用できない	1.52±0.89	2.93±0.73	***
看護計画を立てアセスメントすることができない	1.52±0.94	2.85±0.99	***

(*: $P < 0.05$ **: $P < 0.01$ ***: $P < 0.001$ n.s.: 有意差なし paired t test)

画を立てアセスメントすることができない] (いずれも $P < 0.001$) があつた。実習中と実習前を比べて有意差を認めなかつたストレス者としては「看護日誌, 体温表が書けない」のみであつた。

3 STAIの実習前と実習中の比較 (表3)

STAI (状態不安) において, 実習中は実習前に比べて実習中が有意に高値を示した ($P < 0.01$)。STAI (特性不安) では, 実習前と実習中の有意差を認めなかつた。

表3 STAIの実習前と実習中の比較

項目	(n=27)		有意差
	(平均値±標準偏差)		
	実習前	実習中	
STAI(状態)	46.0±8.1	52.0±8.9	**
STAI(特性)	45.9±8.2	47.6±8.8	n.s.

(*: $P < 0.05$ **: $P < 0.01$ ***: $P < 0.001$ n.s.: 有意差なし paired t test)

4 YG 検査

「抑うつ」では, (平均 8.6 ± 7.2 点) で低い群と高い群に分かれ二極化が認められたが, 「気分の変化」(平均 7.5 ± 5.4 点), 「劣等感」(平均 8.6 ± 4.1 点), 「神経質」(平均 8.6 ± 4.9 点), 「主観的」(平均 7.5 ± 5.4 点), 「攻撃的」(平均 7.7 ± 3.3 点), 「活動的」(平均 11.3 ± 4.3 点) 「のんき」(平均 10.1 ± 4.3 点), 「思考的外交」(平均 9.2 ± 4.1 点), 「支配的」(平均 10.6 ± 4.2 点), 「情緒不安定」(平均 33.3 ± 18.8 点), 「社会不適応」(平均 20.3 ± 9.6 点) と正規分布を示した。

「非協力的」では, (平均 4.9 ± 3.8 点) とやや低く, 「社会的外交」では, (平均 13.7 ± 4.3 点) とやや高め得点を示した。

5 YG 検査と STAI との相関 (表4)

1) YG 検査と STAI (状態不安)

実習前では, すべての項目において相関を認めなかつたが, 実習中は, 「気分の変化」, 「主観的」, 「非協調的」, 「情緒不安定」, 「社会的不適応」($P < 0.05$), および「劣等感」($P < 0.01$) において有意な正の相関が認められた。

2) YG 検査と STAI (特性不安)

実習前は, 「神経質」, 「情緒不安定」, 「社会的不適応」で ($P < 0.05$), 「気分の変化」, 「攻撃的」については ($P < 0.01$) の有意な正の相関を認めた。実習中は, 「気分の変化」, 「劣等感」, 「神経質」, 「攻撃的」, 「情緒不安定」, 「社会的不適応」($P < 0.05$) についての正の相関を認めた。

表4 YG 検査と STAI の相関

	STAI(状態)		STAI(特性)	
	実習前	実習中	実習前	実習中
気分の変化	0.09	0.479*	0.545**	0.389*
劣等感	0.049	0.506**	0.289	0.385*
神経質	0.053	0.219	0.463*	0.411*
主観的	-0.044	0.446*	0.282	0.349
非協調的	0.273	0.391*	0.361	0.354
攻撃的	0.008	0.355	0.503**	0.404*
情緒不安定	-0.002	0.409*	0.461*	0.440*
社会的不適応	0.109	0.646*	0.478*	0.459*

(*: $P < 0.05$ **: $P < 0.01$ ***: $P < 0.001$ pearsonの相関係数)

6 YG 検査と実習ストレスの相関

表5でYG検査と実習ストレスの相関係数と有意差について示した。

YG検査で、辻岡ら¹⁵⁾の報告するいわゆる不安定不適應消極型のプロフィール：「抑うつ」、「気分の変化」、「劣等感」、「神経質」、「攻撃的」、「情緒不安定的」、「社会的不適應」など、性格を表わす因子項目を示すE型は、実習ストレスの「看護日誌、体温表が書けない」、「身体が続かない」、「見ている

だけで手が出せない」、「学校でならったことと違うことがある」、「何をやればいいのかわからない」、「1日の計画をきちんと実行できない」、「看護技術をうまく活用できない」、「看護計画を立てアセスメントできない」の各項目の間で、実習前は有意な相関を認めなかったものが、実習中で有意な正の相関を認めた。

逆に、安定積極型のプロフィール：「活動的」、「社会的外交」の性格因子の高い項目のD型では、

表5 YG 検査と実習ストレスの相関

(n=27)

YG	実習ストレス	実習前	実習中
抑うつ	何をやればいいのかわからない	0.120	0.403*
	看護計画を立てアセスメントできない	0.136	0.430*
気分の変化	看護日誌、体温表が書けない	0.302	0.425*
	実習は身体が疲れる	-0.022	0.461*
	身体が続かない	0.186	0.393*
劣等感	実習は身体が疲れる	-0.117	0.424*
	身体が続かない	0.078	0.413*
	見ているだけで手が出せない	-0.044	0.528**
	学校で習ったことと違うことがある	-0.225	0.484*
	何をやればいいのかわからない	0.042	0.692**
	1日の計画をきちんと実行できない	-0.055	0.493**
	看護技術をうまく活用できない	0.018	0.574**
	看護計画を立てアセスメントできない	0.038	0.531**
神経質	何をやればいいのかわからない	0.028	0.504**
	看護技術をうまく活用できない	0.068	0.411*
攻撃的	看護日誌、体温表が書けない	0.133	0.459*
	実習は身体が疲れる	-0.235	0.455*
	身体が続かない	0.077	0.416*
活動的	実習記録が書けない	-0.119	-0.408*
	実習は身体が疲れる	-0.012	-0.407*
	何をやればいいのかわからない	-0.065	-0.410*
	1日の計画をきちんと実行できない	0.076	-0.548**
	看護技術をうまく活用できない	-0.103	-0.513**
	看護計画を立てアセスメントできない	-0.089	-0.511**
社会的外交	見ているだけで手が出せない	-0.193	-0.394*
	何をやればいいのかわからない	-0.444*	0.364
	看護計画を立てアセスメントできない	-0.317	-0.448*
情緒不安定	実習は身体が疲れる	-0.137	0.419*
	何をやればいいのかわからない	0.083	0.535**
	看護計画を立てアセスメントできない	0.154	0.467*
社会的不適應	看護日誌、体温表が書けない	0.427*	0.402*
	実習は身体が疲れる	-0.044	0.478*
	身体が続かない	0.265	0.472*
	見ているだけで手が出せない	0.129	0.383*
	何をやればいいのかわからない	0.203	0.503**
	看護計画立てアセスメントできない	0.281	0.575**

(*:P<0.05 **:P<0.01 ***:P<0.001 pearsonの相関係数)

実習ストレスの「実習記録が書けない」、「実習は身体が疲れる」、「何をやればいいのかわからない」、「1日の計画をきちんと実行できない」、「看護技術をうまく活用できない」、「看護計画を立てアセスメントできない」の各項目の間で、実習前は相関を認めなかったが、実習中で有意な負の相関を認めた。

7 STAIと実習ストレスの相関 (表6-1, 6-2)

1) STAI (状態不安) では、実習前に「患者から

拒否された」(P < 0.01) および「身体が続かない」(P < 0.05) との間に正の相関を認めた。実習中では、「実習記録が書けない」、「看護計画を立てアセスメントできない」(すべて P < 0.05) および「看護日誌、体温表が書けない」(P < 0.01) との間に正の相関を認めた。

2) STAI (特性不安) では、実習前に相関はなく、実習中に「学校で習ったことと違うことがある」、「何をやればいいのかわからない」(P < 0.01) との間に正の相関を認めた。

表6-1 STAI (状態不安) と実習ストレスの相関

(n=27)

項目	実習前	実習中
患者から拒否された	0.487**	-0.290
身体が続かない	0.472*	0.367
実習記録が書けない	0.213	0.397*
看護日誌、体温表が書けない	0.101	0.541**
看護計画を立てアセスメントできない	0.061	0.418*

(*:P<0.05 **:P<0.01 ***:P<0.001 pearsonの相関係数)

表6-2 STAI (特性不安) と実習ストレスの相関

(n=27)

項目	実習前	実習中
学校で習ったことと違うことがある	-0.275	0.489**
何をやればいいのかわからない	-0.142	0.544**

(*:P<0.05 **:P<0.01 ***:P<0.001 pearsonの相関係数)

考 察

1 対象者背景

実習前と実習中で変化を認めたのは、「アルバイト」、「部活動」、「飲酒」、「健康感」で、実習中には「アルバイト」の週の平均回数の減少、部活動時間の短縮や飲酒回数の減少を認めたが、実習中には、実習準備や課題、レポート作成などによって時間的余裕がなくなることが考えられる。「健康感」についても実習中に低下しており、時間的な余裕がなくなり、十分休息を取る時間がなくなることなどによって健康に自信がなくなると考えられる。

2 実習ストレスの変化

実習ストレスとしての実習に対する不安に関する質問を実習前と実習中で比較すると、「看護日

誌、体温表が書けない」を除く、17項目で高くなっており、実習前に不安を感じていた実習ストレス者に対し、実習中にそれらのストレス者直面することで、よりストレスに感じているということが考えられ、これは、落合ら¹⁾の報告と同様の結果であった。

3 STAI 得点の変化

実習前と実習中の STAI 得点を比べると、特性不安に大きな変化はなかったが、状態不安は実習中で有意に高くなった。特性不安は、不安状態の積み重ねた経験に対する反応で、比較的安定した個人の性格傾向を示すものであるため、実習による影響が小さかったと考えられる。これに対して状態不安は、個人がそのときおかれた環境により変化する一時的な情緒状態であるため、本研究における状態不安の

増加は、臨床実習に対する不安の増強であろう。佐藤⁷⁾は、看護学生を対象にした調査を行い、「実習前よりさらに実習中の STAI の状態不安の平均値が高くなる」と同様の報告をしている。また、河野ら¹⁶⁾は、学生は実習開始前に不安が最も高いが、実習の経過に伴って減少してゆく」と報告している。本調査では、カリキュラムにより調査対象者の実習期間は異なったが、全体的に状態不安が高くなっていった。実習によって経験を積むことで不安が軽減されるとも考えられるが、実習の中では次々と新しい課題に直面するため、状態不安は高い値で維持されたとも考えられる。

4 YG 検査

「非協動的」では、(平均 4.9 ± 3.8 点)とやや低く、「社会的外交」では、(平均 13.7 ± 4.3 点)とやや高めの得点を示し、対照者は全体的に協力的で社会的であると言え、これは、看護学生が一般女子学生に比べ、外向性が高く神経症的傾向が低い集団であるという山本ら¹⁷⁾の報告および田村ら¹⁸⁾や桑田ら¹⁹⁾の看護学生における日本版モーズレイ性格検査の結果とも合致している。

5 YG 検査と STAI の関連

STAI (状態不安) においては、実習前に YG との相関を認めなかったのに対して、実習中では、状態不安のうち、「気分の変化」、「劣等感」、「主観的」、「非協調性」、「情緒不安定」、「社会的不適応」において、正の相関を認めた。状態不安がその時の状態を表すことから、実習中に不安が強くなる者の性格の特徴としては、気分の変化が大きく、劣等感が強く、主観的で協調性がなく、情緒不安定で社会的不適応であるなど考えられる。また、特性不安では、「気分の変化」、「神経質」、「攻撃性」、「情緒不安定」、「社会的不適応」は、実習前も実習中も変わらず高値を示したのは、特性不安が、比較的安定した個人の性格傾向を反映しているといえるであろう。また、特性不安が高い人は YG 検査の性格を表すネガティブな項目、「気分の変化」、「神経質」、「攻撃的」、「情緒不安定」、「社会的不適応」が高値を示すといえる。実習前に比べて実習中に YG と実習ストレスの相関は高く、YG 検査でネガティブな性格である、「抑うつ」、「気分の変化」、「劣等感」、「非協力的」、「情緒不安定」、「社会不適応」においては実習ストレスと正の相関を、ポジティブな性格「活動的」、「社会的外交」などで負の相関を認めた。特に YG 検査で「劣等感」が高い人は、実習ストレスの中で「～できない」といった項目に高い相関を示し、「活動的」が高い人は、「～できない」といった項目に高い負の相関を示している。この理由

として、性格によってストレスに対する感じ方には個人差があると考えられる。また、ネガティブな性格では、「実習は身体が疲れる」、「身体が続かない」といった身体的疲労感が強いことが明らかになり、これは「性格上の精神的不安定さを示す者は疲労度の高い群に属する場合が高い」という本田⁸⁾の報告と同様であった。

6 STAI と実習ストレスとの関連

STAI のうち状態不安においては、実習ストレスの「患者から拒否された」、「身体が続かない」という項目は、実習前には STAI との相関が認められたが、実習中には相関が認められなかったのに対して、逆に実習ストレスの「実習記録が書けない」、「看護日誌、体温表が書けない」、「看護計画を立てアセスメントできない」という項目については、実習前には相関が認められず、実習中には相関が認められた。これは、事前学習では、出来ると考えていたが臨床の現場で、実際に直面すると難しいと感じたと考える。

STAI の (特性不安) においては、実習中に実習ストレスの「学校で習ったことと違うことがある」、「何をやればいいのかわからない」という項目について強く相関を示したが、「身体が続かない」、「実習は身体が疲れる」といった身体的疲労感と特性不安に相関を認めなかった。これらに関して、布施ら²⁰⁾は「特性不安の高い者は、他の者に比べて、よりネガティブな気分状態にあり、精神的疲労感に加え、身体的疲労感も高い」と報告している。今回、我々の検討では、特性不安の高い者ほど、実習中の精神的な疲労感が高い傾向にあったが、一方で身体的な疲労感については関連を認めなかったことより、特に臨床実習においては、ストレスの身体的な影響よりも、精神的な影響の方が、学生の性格に強く関連して出現してくると考えられよう。

今回、臨床実習の調査を平成 17 年 9 月から平成 18 年 2 月の 6 ヶ月としたが、今後、実習内容や期間を限定して検討することで、実習ストレスの内容がより明確になり、青山ら²¹⁾の報告同様、実習前に技術復習指導や事例展開学習など、実習準備を充実させることで不安状態を緩和させられると考える。また、個々の性格を踏まえた精神的なバックアップや臨床実習グループの作成などが実習中のストレスを軽減に繋がると考える。

結 論

本研究では、看護学生の臨床実習におけるストレス因子とストレス反応および性格との相互の関連を検討した。

1. 実習ストレスサーにおいて、学生が実習前に想像した不安やストレスよりも実際に臨床に出て感じるストレスが強かった。
2. STAI (状態-特性不安尺度) において、状態不安については、実習前に比較して実習中に有意に高値を示したことから、看護学生は臨床実習による不安 (ストレス) を感じていることが示された。
3. YG 検査と実習ストレスサーおよび STAI の関連性の検討結果から、ストレスの感じ方には、個々の性格が深く関与することが示唆された。

謝 辞

本研究のアンケート調査にご協力いただいた皆様に心よりお礼申し上げます。

引用文献

- 1) 落合真喜子, 太田原裕美他. 臨床実習における不安とストレス感情. 看護展望, 22 (3) : 101-109, 1997
- 2) 野村幸子, 三好さち子他. 初期の看護実習における学生の実習ストレスに関する研究. 聖隷クリストファー看護大学紀要, 6 : 39-40, 2000
- 3) Adml, H. : Nursing students' stress during the initial clinical experience. J Nurs Educ, 36 (7) : 323-327, 1997
- 4) Pagan, KD. : Stresses and threats reported by baccalaureate students in relation to an initial clinical experience. J Nurs Educ, 27 (9) : 418-424, 1988
- 5) 頼藤和寛. ストレス論再考. 作業療法, 12 (3) : 202-205, 1993
- 6) 東嶋美佐子, 井上桂子他. 臨床実習における作業療法部学生の心理的ストレス反応の変化と性格との関連性. 川崎医療福祉学会誌, 6 (1) : 163-168, 1996
- 7) 佐藤信枝. 臨地実習前の不安要因と STAI との関連 -基礎看護学実習の学生を対象として. 新潟青陵大学紀要, 2 : 39-45, 2002
- 8) 本田優子, 天本まり子他. 中学生における疲労度とエゴグラム-性格タイプとの関連. 保健の科学, 41 (1) , 73-77, 1999
- 9) Spielberger, C.D. Theory and reseach on anxiety. In C.D.Spielberger (ed.) Anxiety and behavior. New York, Academic Press, 1966
- 10) 中里克治, 水口公信. 新しい不安尺度 STAI 日本版の作成. 心身医学, 22, 107-112, 1982
- 11) 谷田部順吉. 矢田部・ギルフォード検査. 岡堂哲雄編, 心理検査学 -心理アセスメントの基本- 初版. 東京, 垣内出版, 269-281, 1975
- 12) 堤由美子. 臨床実習ストレス調査表 (CSQ) の日本語版の開発. 日本看護研究学会雑誌, 17 (4) : 17-26, 1994
- 13) 上里一郎. 心理アセスメントハンドブック. 東京, 西村書店, 339-359, 1996
- 14) B.J.ジンマーマン. アルバート・バンデユーラ編, 本明 寛, 野口京子監訳. 激動社会の中の自己効力. 東京, 金子書房, 190, 1997
- 15) 辻岡美延. 新性格検査法. 大阪, 日本心理テスト研究所株式会社, 1982
- 16) 河野保子. 実習評価に関する研究 -臨床実習に対する看護学生の緊張感・不安感および疲労に関する一考察. 金沢大学医療技術短期大学部紀要, 1 (1) : 133-139, 1977
- 17) 山本有紀, 服部卓他. 看護学生のストレスに関して. 群馬保健学紀要, 19 : 77-80, 1998
- 18) 田村文子, 神郡博他. 看護学生のメンタルヘルスに関する研究. ヘルスカウンセリング学会年報, 2 : 148-150, 1996
- 19) 桑田 繁, 磨家敦子他. 医学と生物學. 東京, 醫學生物學速報會, 136 (1) : 9-11, 1998
- 20) 布施敦子, 大佐賀敦他. 臨床実習に伴う看護学生の疲労感と STAI 特性不安との関連. 日本看護学教育学会誌, 10 (3) : 11-20, 2000
- 21) 青山みどり, 嶺岸秀子他. 基礎看護実習中における学生のストレス II -事前指導の効果. 群馬県立医療短期大学紀要, 5 : 77-87, 1998

Relationship Between Stress and Personality in Nursing Clinical Training

Chiho CHIKAMURA*¹ Fumiko ISHIZAKI*² Tadashi KOYAMA*³
Satomi AOI*³ Tadayuki IIDA*⁴ Toshio KOBAYASHI*¹

*1 Graduate School of Health Sciences, Hiroshima University

*2 Department of Communication Science and Disorders, Faculty of Health and Welfare,
Prefectural University of Hiroshima

*3 Department of Nursing, Faculty of Health and Welfare, Prefectural University of Hiroshima

*4 Department of Public Health, Fujita Health University

Received 12 September 2006

Accepted 12 December 2006

Abstract

We studied the relationship between the stressors and the reaction to stress induced by clinical practice in nursing students. Subjects were 27 female students of K University. The State-Trait Anxiety Inventory Test (STAI) was used for the evaluation of psychological response to stress. STAI and the items of stressors were studied pre-and during clinical practice in hospitals. In order to assess the student personalities, the Yatabe / Guilford (YG) test was conducted during the spring vacation.

The students experienced stress pre-and during clinical training, and also the state-anxiety levels in the STAI were significantly high in those periods. Furthermore, it was shown that students who had higher scores of stressors showed unsocial character tendencies in the YG test, indicating a strong relationship between the reaction to stress and the features of the personalities of the nursing students.

Key words : clinical training, stressor, YATABE / GUILFORD Test (YG), STAI, nursing student